

# コンテキスト概念に関する一考察 ——情報共有の観点から——<sup>1)</sup>

坪 田 芳 範

A Study about the Context Concept from the Viewpoint of Information Sharing

TSUBOTA Yoshinori

## 目 次

1. はじめに
2. 内的視点からのアプローチについて
3. 情報概念とその共有概念
  - 3-1. 情報観について
  - 3-2. 情報共有概念について
4. 情報共有から捉えたコンテキスト
  - 4-1. 有意性体系について
  - 4-2. 類型について
5. 古賀のコンテキスト理解について
  - 5-1. 古賀のコンテキスト理解
  - 5-2. 古賀論の検討
6. おわりに

## Abstract

When information sharing is discussed, it will face with the profound problem about the context concept. Since the context concept is broad, it was discussed from various viewpoints depending on the researcher's interest. In this paper, the context concept is considered from the internal viewpoint.

First, it argues about the approach for dealing with the information sharing concept and the context concept. Especially, the viewpoint which grasps those concepts is important. This paper proposes the approach from the internal viewpoint in order to grasp those concepts. Next, it is considered how information sharing activities and the context concept can be described from the internal viewpoint.

---

1) 本論文は、オフィス・オートメーション学会関西支部第185回月例研究会（2006年11月25日開催）の発表用として準備した草稿を修正・加筆したものである。

**Key Words** : information sharing, context, internal viewpoint

キーワード : 情報共有, コンテキスト, 内的視点

## 1. はじめに

2005年11月発行のオフィス・オートメーション学会誌 (B) 『情報系』 Vol. 26, No. 2において「知識経営とコンテキストのデザイン」というテーマで特集が組まれた。

これまで情報共有について考察してきた者として、この特集は非常に興味深いものであった。遠山にみられるように情報システムをコンピュータシステムに限定せず、幅広く人的・組織的要因を含めた情報システム観が展開されているが、そのシステムでは「情報共有と組織学習のシステム」が基礎におかれるなど、情報共有機能が重要視されている<sup>2)</sup>。

しかしながら、これまでさまざまな論者が情報共有の問題に取り組んできたが、単なるデータレベルの共有から意味レベルの共有までその概念も多様であった。それについては企業組織のコミュニケーション活動を念頭におく以上、意味のレベルで論じるべきであるのだが、意味のレベルで情報共有を問題とするとき、解釈活動が焦点となってくる。その解釈活動においてコンテキスト概念が関わってくることになるのだが、情報の意味とコンテキスト(文脈)の関わりについてふれられているものの<sup>3)</sup>、経営情報研究においてコンテキスト概念そのものについてさらに踏み込んで論じているものとは筆者の知りうる限り巡り合うことは多くなかった。

そのような理由から、この特集は筆者にとって非常に興味深いものであった。とりわけ古賀広志の「コンテキスト重視の情報戦略の射程<sup>4)</sup>」は大変刺激的なものであった。コンテキストも認識活動とのかかわりの中で論じられており、彼のコンテキストについての記述は多くの点で肯定できるのだが、筆者のコンテキストの捉え方とは一線を画するものであった。

そこで本稿では情報共有の視点から捉えたコンテキスト概念について考察を行うとともに、古賀が論じたコンテキスト概念との違いが何に起因するものかについて考察していくことにする。

---

2) 遠山暁 [1998], 105-129頁参照。

3) 例えば遠山暁 [1998], 116頁などを参照されたい。

4) 古賀広志 [2005], 24-30頁を参照されたい。

## 2. 内的視点からのアプローチについて

意味レベルの情報共有におけるコンテキストを論じる前に、まず意味や価値を議論する方法について言及しておきたい。情報の意味や価値に注目してその共有の可能性を探るとき、その捉え方により、それを観察する方法が規定されることになる。

マーケティング研究における消費者行動を捉えるアプローチの一つとして解釈主義的な方法が提示されている。これについてハドソンとオザンヌ（Hudson, L. A. and Ozanne, J. L.）によって、実証主義的な方法と解釈主義的な方法が説明されており<sup>5)</sup>、示唆に富むものとなっている。

それによれば、実証主義者は、現実が客観的存在、または有形的存在で、単一なものとして存在し、分解可能で、可分的な存在であると仮定しているのに対して、解釈主義者は、現実、社会的に構築されたもので、見方により多数存在し、意味はコンテキストに基づいていると仮定している<sup>6)</sup>。

また実証主義者が、一般法則の説明を最優先目標としているのに対して、解釈主義者の研究目標は対象の行動への理解であるのだが、この理解については最終的な成果ではなく、過程として捉えており、終わりのない解釈を続けることを意味する<sup>7)</sup>。このとき、解釈主義の立場をとる研究者はその文化の中に飛び込んで、内部の人間としての視点で対象を捉えていくことが求められる<sup>8)</sup>。一方、実証主義者は対象に自らの影響を与えないように、特権の立場からそれを観察することになる<sup>9)</sup>。

以上のことから実証主義的な立場をとる場合、外部観察を行うのに対して、解釈主義的な立場をとる場合は内的視点からのアプローチをとることが明らかである。この主張を参考に、本稿において意味レベルの情報共有活動ならびにそのコンテキストの役割について考察していくという理由から、意味の完全な一致を検討し、対象間の関係を明らかにし、それを実証するものではなく、あくまでも他者の意図や想いを解釈していくこと目的とし、そのプロセスを内省することでこの問題を考察していくことにする。

---

5) Hudson, L. A. and Ozanne, J. L. [1998], pp. 508-521. 参照。

6) Hudson, L. A. and Ozanne, J. L. [1998], pp. 509-510. 参照。

7) Hudson, L. A. and Ozanne, J. L. [1998], pp. 509-511. 参照。

8) Hudson, L. A. and Ozanne, J. L. [1998], p. 511. 参照。

9) Hudson, L. A. and Ozanne, J. L. [1998], pp. 509, 512. 参照。

### 3. 情報概念とその共有概念

#### 3-1. 情報観について

まず本稿において情報共有における情報概念をどのようなものとして捉えているのかについて明確にしておきたい。

日置は「組織インテリジェンス」の観点から情報概念について論及している<sup>10)</sup>。その中で彼は情報概念を物理的存在と意味的存在とに二分する捉え方には問題が多いことを指摘している<sup>11)</sup>。彼は情報概念をそのように二分する考え方について、情報を利用する人々の処理スタイルの違いとして捉えた場合は成り立つが、情報そのものが物理的な存在から意味的存在に変換されるとする考えに対しては否定的な立場をとっている<sup>12)</sup>。そして彼は「情報の収集はなんらかの情報収集のコンテキストがあってはじめて行われ、無造作に情報収集が行われるといったものではない。情報のソースを確認するという作業を経なければ情報評価は行えないことは当然であり、無目的に情報を眺めるという状況は非常に不自然である<sup>13)</sup>」と主張する。そのため、情報それ自体の区分を認めていない<sup>14)</sup>。

一方、日本語の情報概念は英語の「インフォメーション」あるいは「インテリジェンス」と訳されるが、これらの言葉はともに意味をもつものとして取り扱われながらも、「インテリジェンス」は解釈や評価が行われるものとして、そして「インフォメーション」は特別そのようなことは行われずに、機械的な処理の対象として取り扱われるものとして日置は区別している<sup>15)</sup>。日置はとくに「インテリジェンス」に対象を理解するための「わけ」を明らかにする働きを求めている<sup>16)</sup>。

この区別はマクドノウ (McDonough, A. M.) の「データ (data)」概念と「情報 (information)」概念の区別と重なるものと考えてよいだろう。彼も情報を物理的に捉えるべきものではなく、概念的に捉えるべきものと主張し、意思決定者が問題解決の際、価値を見出したものを「情報」、そうでないものを「データ」としたが、データもそれが

10) 日置弘一郎 [1993], 108-125頁参照。

11) 日置弘一郎 [1993], 113-114頁参照。

12) 日置弘一郎 [1993], 113-114頁参照。思考実験として認めている特殊な例示についても言及されているので114-117頁を参照されたい。また情報を物理的な存在と意味的な存在に二分する考え方についてはとくに113頁を参照されたい。

13) 日置弘一郎 [1993], 114頁引用。

14) 日置弘一郎 [1993], 118頁参照。

15) 日置弘一郎 [1993], 109-113, 118頁参照。

16) 日置弘一郎 [1993], 122頁参照。

利用されているということは、過去に何らかの形で評価されたものとみている<sup>17)</sup>。

このように用語の違いこそあれ、情報概念を意思決定等、何らかの目的意識で評価されているものと考えている点では両者の捉え方にそれほど差はないと考える。そこで本稿では「インテリジェンス」についての概念を問題にしていないこともあり、用語としては「情報 (information)」を、使用していく。

### 3-2. 情報共有概念について

さて、本稿では内的視点からのアプローチにより情報共有活動を捉えていくが、その活動の中で一般にコンテキストと呼ばれるものの役割について論じていくことにする。

まず、内的視点のアプローチをとるが、その際、シュッツ (Schutz, A.) の記述を参考にして他者とのコミュニケーション活動について以下で検討していくことにする<sup>18)</sup>。

彼の考えにしたがえば、内的視点のアプローチによって他者を理解するとき、他者の身振り、行動などから他者の意識を自らの経験と重ね合わせて解釈することで他者を理解することをはじめめるのだが、それからさらに他者と自らの「意識の流れ」が同時に存在することを感ずるようになることで共有感が醸成されることになる<sup>19)</sup>。

そして解釈者が他者の意図や想いを解釈するとき、この活動は解釈者の意識作用の中で行われた経験を記述することになる<sup>20)</sup>。このことは解釈者自身の経験から他者についての解釈が行われることを意味するのだが<sup>21)</sup>、すでに行われてしまった他者の行為を問題にするとき、他者の目的についての動機を解釈者自らの目的についての動機として事後的に解釈することになる<sup>22)</sup>。解釈者は他者の意図や想いを厳密に理解することができないため、また現実問題としてそこまでの必要性はなく、シュッツは動機などが類型として捉えることができれば十分であるとみている<sup>23)</sup>。しかしながら、このことは同じ条件下で誰もが同じように振舞うだろうという前提があるときのみ、その理解が可能になるということに留意しなければならない<sup>24)</sup>。

---

17) McDonough A. M. [1963], pp. 14, 70-72, 75-76, 199-200 (邦訳書 [1966], 14-15, 72-73, 77-78, 207-208頁) 参照。

18) 以下はSchutz, A. [1970] (邦訳書 [1980]) の記述を基礎している。

19) Schutz, A. [1970], pp. 164-195 (邦訳書 [1980], 148-189頁) 参照。

20) Schutz, A. [1970], p. 167 (邦訳書 [1980], 153頁) 参照。

21) Schutz, A. [1970], pp. 168-175 (邦訳書 [1980], 153-163頁) 参照。

22) Schutz, A. [1970], pp. 175-177 (邦訳書 [1980], 163-165頁) 参照。

23) Schutz, A. [1970], pp. 180-181 (邦訳書 [1980], 169-171頁) 参照。

24) Schutz, A. [1970], p. 181 (邦訳書 [1980], 171頁) 参照。

また、解釈者と他者が同じ対象を認識する際、厳密にはその観点や目的、それに起因する有意性体系の違いから意味が異なっていると、解釈者自身の意識の中で他者との立場を置き換えれば同じようにみえると考えたり、多少の意味の差異があったとしても、両者の目的にとってそれが大きな問題とはならなかったり、同様の方法で共通の対象を解釈していると感じれば、両者は同じものを捉えていると考えることができるのだが、これもまた対象を類型として捉えているからなのである<sup>25)</sup>。さらにそのように考えることによってその捉え方は他者とだけでなく、有意性体系を実質的に共有している不特定多数の人へと広がりをもたせることが可能になる<sup>26)</sup>。

しかしながら、他者と対面状況にあるときには、解釈者によって他者についての解釈が事後的に行われるのではなく、経験を重ね合わせることになる<sup>27)</sup>。この対面状況においては、認識主体は他者を認識し、他者を、実際に生きており、意識をもつ人間として注意を向ける必要がある<sup>28)</sup>。そして彼らが相互にそのように意識し合うとき、そこでは認識主体と他者は経験を共有していくことになる<sup>29)</sup>。このとき、他者の意識を把握している状態で、本稿が考える高次元の意味レベルの情報共有が行われていると考える<sup>30)</sup>。

なお、認識主体と他者の存在が同時に同じ場所にはない状況、つまり、他者によって作成された電子メールや文書等を読むときの状況での関係をシュッツは「派生的関係」と呼んでいるが、この状況でのコミュニケーションは他者の意識を把握していることにはならない<sup>31)</sup>。他者と経験を共有する、あるいは他者の意識を把握するためには他者と認識者が互いの姿を確認できる状態が必要とされている<sup>32)</sup>。

#### 4. 情報共有から捉えたコンテクスト

さて、上述したように内的視点のアプローチにより情報共有を他者の意識を把握するための行動として捉えてきたが、その際、コンテクストとしての特徴や役割はどのような作用によって引き起こされると考えるべきであろうか。

25) Schutz, A. [1970], pp. 183-184. (邦訳書 [1980], 173-175頁) 参照。

26) Schutz, A. [1970], p. 184. (邦訳書 [1980], 174-175頁) 参照。

27) Schutz, A. [1970], p. 177. (邦訳書 [1980], 165-166頁) 参照。

28) Schutz, A. [1970], pp. 184-186. (邦訳書 [1980], 175-178頁) 参照。

29) Schutz, A. [1970], pp. 186-195. (邦訳書 [1980], 177-189頁) 参照。

30) Schutz, A. [1970], pp. 166-167, 179, 192-195. (邦訳書 [1980], 150-151, 168, 185-189頁) 参照。

31) Schutz, A. [1970], p. 218. (邦訳書 [1980], 221頁) 参照。

32) Schutz, A. [1970], p. 218. (邦訳書 [1980], 221頁) 参照。

新村出編『広辞苑』（第五版）、岩波書店によれば、コンテキストは「文章の前後の脈絡。文脈。コンテキスト。<sup>33)</sup>」と説明されている。また、古賀はコンテキストにいわば認識枠組としての機能を見出している<sup>34)</sup>。

結論から言えば、コンテキストの特徴である前後の関係や脈絡はシュッツがいうところの「有意性体系」を形成する際、回顧的に働く意識の志向性に起因し、そこで形成された有意性体系を構成する言葉の意味が「類型」として認識されていることから、その類型が価値観や認識枠組としての機能をもつと考える<sup>35)</sup>。それでは彼のこれらの概念についての主張を詳しく考察していくことにしよう。

#### 4-1. 有意性体系について

まず、先述したように解釈活動は解釈者自身の意識活動の経験の記述とされるが<sup>36)</sup>、経験というものはリアルタイムで進行しているときには意識されることはなく、何らかの注意によって意識され、その注意が及ぶまでの記憶の流れが切り取られ、構成・意味づけられるものと考えられている<sup>37)</sup>。このとき視覚や聴覚などの知覚活動は常に意識されている状態で行われているわけではないため、知覚と同時に意味づけが行われているというわけではないということを留意しておきたい<sup>38)</sup>。

シュッツは「回顧するまなざしにとってのみ、他から区別された経験は存在する。したがって、すでに経験されたもののみが有意味であり、経験されつつあるものはそうではない。なぜなら、意味とは志向性の働きにほかならず、しかも、それは反省的なまなざしにのみ示されるものだからである<sup>39)</sup>」と主張する。またその一方、明確な意識のもとで対象を捉えるとき、過去から現在、そして予想される未来への意識する視点や範囲が規定されることになる<sup>40)</sup>。

そして把握される状況については、それは自然的環境だけでなく、社会的、文化的環境などが複合的に捉えられており、これまでの生活の歴史に規定されながら個人的な知識の体系として蓄積・構築されていく<sup>41)</sup>。そして状況の構成要素を関係づける有意性体系は、

33) 新村出編 [1998], 1024頁引用。

34) 古賀広志 [2005], 25-26頁参照。

35) 以下はSchutz, A. [1970] (邦訳書 [1980]) の記述を基礎にしている。

36) Schutz, A. [1970], p. 167. (邦訳書 [1980], 153頁) 参照。

37) Schutz, A. [1970], pp. 60-64. (邦訳書 [1980], 11-16頁) 参照。

38) Schutz, A. [1970], p. 67. (邦訳書 [1980], 20頁) 参照。

39) Schutz, A. [1970], p. 63. (邦訳書 [1980], 16頁) 引用。

40) Schutz, A. [1970], pp. 68-69. (邦訳書 [1980], 22-23頁) 参照。

41) Schutz, A. [1970], pp. 73-74. (邦訳書 [1980], 30頁) 参照。

その個人の関心、目的その他により決定され、その後の状況の要素の類型化をも規定するようになるのだが、知識は完全に一貫して構築されているものではなく、曖昧さや矛盾を内包しつつも進化や再構成されていくと捉えられている<sup>42)</sup>。

#### 4-2. 類型について

シュッツによれば、人はもともと世の中のものを類型として捉えている<sup>43)</sup>。さらに、認識対象につける名前それ自体からして類型で捉えているのである<sup>44)</sup>。そして認識した対象が過去に経験したものと同一類型か否かを検討し、同じであればそれを当てはめていくのだが、その活動が繰り返し行われていくにしたがって類型のもつ内容が一般化されていく<sup>45)</sup>。その過程の中で認識対象をこの一般化された見本と重ね合わせることができる場合、対象の行動や特徴を予想することが可能になり、またその後のあらたな経験により、一般化された類型も訂正や修正が加えられていく可能性をもつのである<sup>46)</sup>。

シュッツが類型化の例として「犬」を挙げて説明しているように、そこでは認識対象である動物を「犬」として捉えるとき、これまでの経験から認識した犬の特徴と一致すれば、初めて見る種類の犬であっても、その一般化された類型から犬としての行動や歯のかたちなどの特徴を類推することが可能になる<sup>47)</sup>。

そしてこれらの類型は認識者自身によって形成されるが、その多くが世代を超えて他の人々によって形成され、その集団の中で引き継がれてきたものであり、社会的につくり上げられてきたものである<sup>48)</sup>。そのため、それらの継承は教育によって行われ、集団における世界を解釈する枠組となっていくことになるのである<sup>49)</sup>。それではその類型のいくつかの機能について、みていくことにしよう。

まず、認識した対象を類型にあてはめることが可能である状況下において、類型的な問題がその類型的な方法で解決できるよう、どのような対象を実質的に同じ類型に属するものとして取り扱えばよいのかを決めるといふ機能がある<sup>50)</sup>。

42) Schutz, A. [1970], pp. 73-76. (邦訳書 [1980], 30-34頁) 参照。

43) Schutz, A. [1970], pp. 116-117. (邦訳書 [1980], 85頁) 参照。

44) Schutz, A. [1970], pp. 117-118. (邦訳書 [1980], 86-87頁) 参照。

45) Schutz, A. [1970], pp. 116-117. (邦訳書 [1980], 85-86頁) 参照。

46) Schutz, A. [1970], pp. 116-117. (邦訳書 [1980], 85-86頁) 参照。

47) Schutz, A. [1970], pp. 116-117. (邦訳書 [1980], 85頁) 参照。

48) Schutz, A. [1970], pp. 96, 119. (邦訳書 [1980], 58-59, 88-89頁) 参照。

49) Schutz, A. [1970], pp. 119-120. (邦訳書 [1980], 89-90頁) 参照。

50) Schutz, A. [1970], p. 120. (邦訳書 [1980], 90頁) 参照。



そして、つぎに個人の行為を、類型的目的を達成しようとする類型的動機から導かれる類型的な社会的役割の機能として捉えていく<sup>51)</sup>。実際、社会的役割を担う者はその集団からその類型に該当する振る舞いが期待される<sup>52)</sup>。それによりこれらの類型は対象を解釈するための枠組として機能する一方で、いかに振舞うべきかを考える枠組として機能することになる<sup>53)</sup>。たとえば、シュッツが例として挙げているものの中に「職場のリーダー」があるが、その役割を担う者は彼自身の中で形成されているリーダーとしての類型にしたがって行動することになる<sup>54)</sup>。

このように類型に従って行動する人は、類型としての動機やそれにもとづいた類型的な目的、そして振舞いについても類型的に行動することが期待されるようになるのだが、その広がりにより、それらの類型を受け入れ、その類型にしたがって行動している人であれば、円滑に付き合っていくことが可能であるとの認識を醸成することになる<sup>55)</sup>。それゆえ、他者を理解し、自己を理解させるには、それぞれの類型を受け入れて、解釈し、そして類型にしたがって振舞う必要がある<sup>56)</sup>。そしてこの類型がルールや儀礼などに見られるように標準化され、社会的な制度として確立するとき、他者と自己のそれぞれの類型が一致する可能性を高めることになる<sup>57)</sup>。

シュッツは、「理解された類型による世界解釈とは、決して論理的な推論の産物ではないし、まして科学的概念化の結果などではないことを強調しておかなければならない。世界は、社会文化的なものであれ、物理的なものであれ、最初から類型によって経験される<sup>58)</sup>」と主張する。そもそもシュッツが言及しているように「日常言語の語彙や文法は、言語集団によって社会的に認められた類型化の縮図<sup>59)</sup>」との認識をもつなら、この主張も納得できよう。これらの諸類型によって有意性体系が形成されるため、有意性体系に価値観や認識枠組としての機能を伴うことになると思う。

以上、シュッツの有意性体系ならびに類型概念を基礎に情報共有過程について考察した

---

51) Schutz, A. [1970], p. 120. (邦訳書 [1980], 90頁) 参照。

52) Schutz, A. [1970], p. 120. (邦訳書 [1980], 90頁) 参照。

53) Schutz, A. [1970], pp. 120-121. (邦訳書 [1980], 90頁) 参照。

54) Schutz, A. [1970], p. 120. (邦訳書 [1980], 90頁) 参照。

55) Schutz, A. [1970], pp. 120-121. (邦訳書 [1980], 90-91頁) 参照。

56) Schutz, A. [1970], p. 121. (邦訳書 [1980], 91頁) 参照。

57) Schutz, A. [1970], p. 121. (邦訳書 [1980], 91頁) 参照。

58) Schutz, A. [1970], p. 119. (邦訳書 [1980], 89頁) 引用。

59) Schutz, A. [1970], p. 120. (邦訳書 [1980], 89頁) 引用。

が、これらを通して次の点が明らかになった。

まず、コンテキスト概念はさまざまな意味で利用、説明されるが、本稿ではこの概念の根幹をなすのは前後の関係、脈絡としての特徴と考える。先述したようにこのコンテキストの特徴は回顧的に働く意識の活動に起因していると考え。次に有意性体系をなす言葉そのものが類型として捉えていることがシュッツの記述からわかるが、その類型としての機能によりコンテキストが認識枠組として機能し、そこからさらに価値観を生み出していると考え。

またコンテキストを捉える方法についても言及しておこう。まず外部観察の方法では、コンテンツとコンテキストを区分し、両者の関係から何かしらの一般法則を見出すことが求められるだろう<sup>60)</sup>。しかしその場合、コンテキストは他方のコンテンツ、あるいは別のコンテンツとして扱われることになり、そこからコンテキストとしての特徴である前後の関係や脈絡を説明することが困難であると考え。それに対して内的視点のアプローチから意識活動を説明することによって、解釈活動の中でコンテキストの特徴として挙げられている機能が生成される根拠を説明することや、有意性体系が認識枠組としての機能をもつのかについて説明することが可能であると考え。以上の点からこのアプローチの有効性を再認識することができる。

## 5. 古賀のコンテキスト理解について

以上、コンテキストを議論する観点やシュッツの「有意性体系」概念や「類型」概念を基礎にしたコンテキストとしての機能・役割について説明してきた。本節では、本稿とのコンテキスト理解が近いと思える古賀の主張を辿りながら、彼がコンテキストをどのような目的で捉えてきたのかについて検討していくことにする。

### 5-1. 古賀のコンテキスト理解

まず、古賀の問題としているのは組織コンテキストの変革とみてよいだろう<sup>61)</sup>。

つまり、古賀は組織で共有されているコンテキストは組織慣性を生み出し、組織に閉塞感をもたらしてしまうため、その変革が必要とするのだが、その対策として新しい情報通信技術を導入したり、プロジェクトチームを組織したりすることによって、新たな「場」を提供し、そこで行われるコミュニケーションによって、普段、意識されることのない組

60) Hudson, L. A. and Ozanne, J. L. [1998], pp. 509-511. 参照。

61) 古賀広志 [2005], 28-30頁参照。

織コンテキストを意識させ、それを内省させることで、その時点において支配されている組織コンテキストの変革を目指そうとするものである<sup>62)</sup>。

この主張の中で、古賀はコンテキストの定義を「コンテンツの間の布置（関係性）を解釈する着眼点<sup>63)</sup>」とし、「複数のコンテンツからなる状況の意味形成を担う要因としてコンテキストをとらえる<sup>64)</sup>」としている。

そこでのコンテンツは組織における「人工物、参加主体、参加主体の行為、参加主体間の相互作用などの具象化された対象<sup>65)</sup>」とし、「コンテンツとコンテキストは必ずしも一対一の形で対応するとは限らない<sup>66)</sup>」としている。また彼は、コンテキストは行為主体によって解釈されるものであるため、コンテキストは行為主体によって異なるものとみているが、だからといって完全な主観というわけではなく、所属する集団内である程度ではあるが共通理解が形成されているとして、それを間主観的存在として理解すべきことを強調している<sup>67)</sup>。

そしてコンテキストを重視した情報戦略では「行為者ネットワーク」としての組織構成員と情報通信技術は同等の構成要素として取り扱われている<sup>68)</sup>。これは両者が組織コンテキストに同等に影響を受けているとみなしているためである<sup>69)</sup>。つまり、組織構成員が行う業務や、情報通信技術を扱う際のデータの解釈やシステム運用の背景となる考え方などは組織コンテキストに染まった活動であるとみている<sup>70)</sup>。そのため新しい情報通信技術の導入やプロジェクトチームを組織して組織に変化をうながすことで既存のコンテキストを炙り出し、変革の契機を見出そうとしている<sup>71)</sup>。

## 5-2. 古賀論の検討

まず、本論での立場と古賀のコンテキストに対する基本的立場を整理しておこう。

本論ではコンテキスト概念を情報共有の観点から検討している。そのため、あくまでも

---

62) 古賀広志 [2005], 28-29頁参照。

63) 古賀広志 [2005], 25頁引用。

64) 古賀広志 [2005], 25頁引用。

65) 古賀広志 [2005], 25頁引用。

66) 古賀広志 [2005], 25頁引用。

67) 古賀広志 [2005], 25頁参照。

68) 古賀広志 [2005], 29頁参照。

69) 古賀広志 [2005], 29頁参照。

70) 古賀広志 [2005], 29頁参照。

71) 古賀広志 [2005], 29頁参照。

コンテキストを情報共有を促進させる目的で捉えているのだが、これまでみてきたように古賀においてもその役割を認めつつも、組織変革を起こす際、それが阻害要因となることを指摘し、その時点におけるコンテキストの変革を図ることを目的にしている。このような立場の違いについてはコンテキストの本質を異なるものとしなため、とくに問題にはしない。

つづけて、コンテキストの捉え方についての検討であるが、本論では情報共有について他者を理解する目的でコンテキストがどのように機能するのかを捉えており、そのためには先述した内的視点のアプローチからコンテキストとして機能する「有意性体系」や「類型」の機能を意識作用として捉え、シュッツの記述をもとにそれらを明らかにしてきた。それに対して古賀論における観察視点は曖昧である。たとえば、「解釈主体を取り巻く状況がコンテンツ理解の多義性を生み出すために、複数のコンテンツを包含する形でコンテキストが位置づけられることになる<sup>72)</sup>」との記述から外部からの視点で捉えていると推察される。しかしながらその一方で、「協働体の価値観や行動パターンに染まった人々は、コンテキストの存在自体に気がつかない場合が多い<sup>73)</sup>」との内部からの視点を意識したかのような記述も見受けられる。このような観察視点の曖昧さは、意味レベルの情報共有を論じるパースペクティブを曖昧にしている。

また彼が主張した組織コンテキストは、組織変革論における「組織価値<sup>74)</sup>」と非常に近い概念であり、そのまま組織価値概念を当てはめることが可能であると考えられる。コンテキストを認識対象の背景としてみるのであれば、認識対象の捉え方次第では、組織価値を組織コンテキストと捉えることは可能であろう。事実、本稿でもシュッツの主張をもとにコンテキストに認識枠組としての働きがあることを言及した。しかし、組織価値が前後関係や脈絡といった特性を説明することは困難である。

結果として古賀はコンテキストをコンテンツとして取り扱ってしまったといえる。そしてそのように扱ってしまう原因として本稿では、観察視点の曖昧さ、つまり外的視点を紛れ込ませてしまったことに起因すると考える。

## 6. おわりに

以上、情報共有の視点からコンテキスト概念の検討を行った。本稿では認識過程にお

---

72) 古賀広志 [2005], 25頁引用。

73) 古賀広志 [2005], 25頁引用。

74) 庭本佳和 [1997], 255-270頁を参照されたい。

る意識の働きをシュッツの「有意性体系」と「類型」概念をもとにして論及してきた。ここではあらかじめコンテキスト概念を定義することはせず、認識活動における意識作用を内部の視点によるアプローチで説明することでコンテキストとしての働きとくに前後関係や脈絡といった特性を炙り出した。逆に外部の観察視点からコンテキストを定義し、議論するとき、それはコンテンツとして論じられてしまうおそれがあることを指摘した。

本稿を通して価値や意味を問題とするときの外部観察の限界を提示したと同時に、内的視点のアプローチの有効性を示すことができたと考える。

## 参考文献

- 古賀広志 [2005], 「コンテキスト重視の情報戦略の射程」, オフィス・オートメーション学会誌(B) 『情報系』特集：知識経営とコンテキストのデザイン, オフィス・オートメーション学会, Vol. 26, No. 2, 24-30頁。
- 遠山暁 [1998], 『現代 経営情報システムの研究』, 日科技連。
- 新村出編 [1998], 『広辞苑 (第五版)』, 岩波書店, 1024頁。
- 庭本佳和 [1997], 「組織変革とヒューマン・リソース」, 山本安次郎・加藤勝康編著, 『経営発展論』, 文眞堂, 252-274頁。
- 日置弘一郎 [1993], 「組織におけるインテリジェンス」, 『経済論叢』, 京都大学, 第152巻第3号 飯野春樹教授記念号, 108-125頁。
- Hudson, Laurel Anderson and Ozanne, Julie L. [1988], "Alternative Ways of Seeking Knowledge in Consumer Research", *Journal of Consumer Research*, Vol. 14 (March), pp. 508-521.
- McDonough, Adrian M. [1963], *Information Economics and Management Systems*, McGraw-Hill. (松田武彦・横山保監修, 長阪精三郎・吉川幸男・鎌田安彦訳・[1966] 『情報の経済学と経営システム』, 好学社。)
- Schutz, Alfred [1970], *On Phenomenology and Social Relations*, Selected Writings (Edited and with an Introduction by Wagner, Helmut R.), The University of Chicago Press. (森川眞規雄・浜日出夫訳, [1980], 『現象学的社会学』, 紀伊國屋書店。)